

可觀小説卷三十

一、肥前唐津領の凶饑

御鷹師宇野七丞弟醫者にて、肥前國唐津領主土井大炊頭殿に仕、上田玄孝と申候。去秋以來凶饑の様子、當春七丞迄差越候書狀の寫如左。

爰許去秋蟲入皆損にて、秋頃より米は元よりの儀、麥・大豆其外何によらず給物の類殊の外高直に罷成、米も去暮は一石七十目位にて候所、春に成次第に高く罷成、當節は石百四十一匁に成候。大豆抔も石七十目餘にて、其外給物類十層倍に罷成候。依之餓死人御座候。大麥一俵三斗三升入二十六匁仕候。粉糠一升十八匁仕候。

右の趣に付物體の給物高直に罷成候。西國一統に皆損、唐津七萬石の領知例年拾四五萬俵納り候處に、漸三千俵ならずでは納不申候。此三千俵は七萬石の種米に成候故、粃の儘にて指置候。中々種米三千俵にては行届申事にて無之候得共、當年米の才覺も調不申候。

西國一統の大飢饉。依之去冬以來大分の餓死、日々夜々に

明年餓死仕にて可有之候。當年も三萬俵御廻米にて、六月迄の扶持米有之候へども、夫より先々の扶持米一粒も無之事に候へば、取續如何可致やと、今日よりとやせんかくやと心を痛申候。例年十四・五萬俵も納り申所に、皆損にて三萬俵の御廻米と、七千兩の拜借金にて、江戸・大阪・國本の賄に候へば、跡へも先へも行ぬ管に御座候。

此間從公儀被仰付候は、西國への御廻米被仰付候處御米切候。依之唐津城付の御用米一萬五千俵、當六月切に大坂へ指出候様に、此間江戸より申來。旦那殿にも十方に暮られ、家中も腰をぬかし申迄にて、散々無是非最早旦那にて刻にて候。苦々敷儀可申様も無御座候。一萬五千俵の米一粒も心當無御座候。去年一萬五千俵對馬へ被相渡、又此度一萬五千俵被指出候へば可成様無之候。兎角此上は天運次第、必死の場にて御座候。何も打寄、是は如何成事哉と申迄にて今日を送り、先の手一圓見え不申候。

此節結構成物は用に立不申候故に申上候。此品にて諸事御推量可被成、隨分結構成仕立の具足貳拾目位、銀拵の鎗一筋二匁位、純子・飛紗綾・縮緬・女向の小袖三つ物にて、九

胸を痛めしめ申迄にて兎角絶言語候。前々飢饉と申咄は承及候へども、正眞の飢饉に出合申儀は此初て、散々難儀千萬成儀難盡筆紙候。夥敷餓死、先近國にて筑前領分にては、去冬より此間迄十三四萬人に及候。佐賀松平丹後守様御領分にて九萬人餘、其外平戸・大村・小倉・柳川・唐津にても、五千・七千或は一萬人有之候。唐津領にて今日迄五千餘人致餓死候。物體の儀も此餓死人にて御推量可被成候。前代未聞の儀にて盜賊・火付・土藏の尻を切、晝夜を不分騒敷、夜の目もとくと臥不申致用心候。爰元城下町屋付火仕候。當月四日の夜も大名町と申所、二十軒餘致燒失候。依之助米も被指出候得共、中々七萬石の領分に五千俵出候ては、行届申事にて無之候。從御公儀廻米三萬俵買被申候得共、家中へ給り候故、扶持さへも不足仕事に候得へば、助米の所迄行届不申候。

百姓共今日の給物無之に付、田作に取懸り申事且て成不申、此儀第一に氣毒絶言語候。七萬石の領分三之一も田植付可申や、給物無之候へば田を耕し申事不成仕合。當秋半作迄にて付不申候。比日私共初家中一統餓死不申候も、

匁・十匁位に御座候。

去春より誰申とも無之、今年の内西國の人六歩に成候と、どこともなく申ならし候に付、何を申事やらんと申候處、果して此節か様に餓人數萬人に罷成候。此末何程に成可申も難計候。去々年より牛馬多く死、犬麻疹をいたし多く死候。か様の儀先表にても御座候。以上。

二月十三日 三月七日到來

上田玄孝

一、駿臺雜話の中書違の儀室鳩巢來狀

駿臺雜話の中、老夫書違の處々、別紙に被申越、藤太夫殿の御心付いづれも御尤に候。可然御心得可給候。其中又愚存の趣、御紙面に書加進候。右の書一見望申衆へ御見せ候由尤に候。兎角此書は世人の爲に、態とかな書に調申事に候得共、世にも廣く傳申意得にて候。去共刊行をいづれもすゝめ候得共、上様へも進獻仕事に候へば、刊行いたし候はゞ窺不申候ては如何と存候。其上輕々敷刊行候て、世にはやり候近來かな書の物なみに、世人意得候も無本意候。是は先指止可申候。只由比氏などの様に感心ある衆へ爲見、又は傳寫もさせ申がよく候。其内書坊の者の手へ渡り